

自宅で長男の赤ちゃんを抱く吉川遼さん(右)と千佳さん=いずれも6月、名古屋市



6月12日未明、名古屋市の産院。小学校教諭吉川千佳さん(28)は陣痛で顔をゆがめながら分娩室へ運ばれていた。隣で何時間も腰をさすってくれていた大金講師の夫遼さん(30)は、感染防止のため出産には立ち会えない。妊娠中、励ましてくれた母や姉は建物にすわり入れなかった。「ここから先は私一人だけだ。心細さをぐっと押し殺し、分娩室に入った。

感染リスク障壁に

立ち会い禁止、オンライン面会

1時間半後、無事に長男の赤ちゃんが誕生した。「頭を見たなら、痛さが吹き飛んだよ」。苦しい初産を終え、15分だけ面会を許された遼さんと感動を分かち合った。それもつかの間。ビビ、ビビ、タマッ。タイムアの無機質な電子音が鳴った。「面会終了です」。昨秋妊娠が分り、夫婦で胎児のエコー画像を見たときは自然と涙が出た。出産までの流れや立ち会い出席の資料を一緒に読み、期待で胸を膨らませた。健診も夫婦で通い、順調だった。年明けから状況は一変。新型コロナウイルスが世界中にまん延し、瞬く間に日本に及んだ。テレビが妊婦重症化の可能性や著名人の訃報を伝えると、食卓に緊張感が漂った。近所の病院では集団感染が発生し、恐怖感が増す。4月に政府が緊急事態宣言を発表すると、状況は悪化。産院の立ち入りは本人のみになり、遼さんは車内で帰りを待った。下旬には希望していた立ち会い出

コロナ禍中の初産想定外連続

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、ある夫婦が経験した初産は想定外の連続だった。感染リスクが障壁となり、立ち会い出産は禁止に。パパの産後の面会はオンラインに制限された。不安を乗り越えて退院したが、コロナ禍の収束は見通せない。家族は声感いを抱えながら新たな日常に向き合っていく。



長男とオンライン面会。退院まで直接の面会は制限されていた

8月31日(月)神戸新聞 夕刊分

産も禁止になった。「一緒に親になつていく過程をすっ飛ばしてしまつた気がする」。遼さんはすつともやもやを抱えている。病院や自治体が主催する授乳や沐浴を学ぶ両親学級は相次いで中止に。出産直後も赤ちゃんを抱いたのは数分で、その後はスマホを介したオンライン面会のみ。親になった実感がなかなか持てなかった。退院の日、空は晴れていた。「いいねー、パパに抱っこしてもらえたね」。千佳さんがほほ笑む。遼さんは初めて、ゆつくりとわが子を抱いた。これからは二人、さよならも言わずに一緒にスタートラインに立てた。

新しい生活様式の中での出産。
 看護師にとっても 助産的な行為だけでなく
 リモート立ち会いへの配慮など余分な作業に
 価値感を求められる時代かもしれないですね。
 病院の待合廊下で、見えぬ病室に向けて
 そわそわする 得も言われぬ初声に感激する。
 知らない者には新しい、知っている者には懐しい
 生活様式を思い出したいものです。(知っている我々にとりては)